大学生活におけるソーシャル・キャピタルと 主観的ウェルビーイングの縦断的变化(1) —学部1・2年次間の共通性と差異に関する検討—

芳賀道匡¹・高野慶輔^{1, 2}・坂本真士³

(¹日本大学大学院文学研究科・²レーベン大学・³日本大学文理学部)

キーワード: 社会関係資本, 大学, ウェルビーイング

A longitudinal study of university's social capital and subjective well-being (1)

Michimasa HAGA¹, Keisuke TAKANO², Shinji SAKAMOTO³

(¹Graduate School of Literature and Social Sciences, Nihon University, ²Leuven University, ³College of Humanities and Sciences, Nihon University)

Key Words: social capital, university, longitudinal study

目 的

ソーシャル・キャピタル(Social Capital; SC)は、信頼、支え合い、ネットワークに代表される社会関係の特徴のことであり、それを蓄積と利用が可能な社会的資源と見なした概念である。SCは、コミュニティ間で蓄積量が異なるとされ(Putnam, 2000 柴内訳 2006), SCがより蓄積されているコミュニティにおいて、住民がより健康または幸福であることが示されている(e.g. 相田・近藤, 2014; Portala, Neira, & Salinas-Jiménez, 2013)。そのため、SCの蓄積は1つの社会的課題となっている。しかし、国内の先行研究の多くは一般住民に対する社会調査であり、SCと、それに伴う健康や幸福感すなわち主観的ウェルビーイング(Subjective well-being; SWB)の関連について、未成年が所属しているコミュニティを対象にした研究は不足している。

そのため本研究では、四半世紀ほどの間に国内において急増した大学に焦点を当てる。大学間で、未成年の学生を中心として構成されている学部1・2年次間のSC(仲間, クラス, 教員)とSWB(抑うつ, 大学満足感, 人生満足感)について調べ、1-2年次間の共通性と差異について検討する。

方 法

2012年9月-2013年1月(time1), および2013年10月-2014年1月(time2)の期間で行った質問紙調査のデータのうち、対応のとれた23校(うち女子校6校)のデータを用いた(なお、学生間(time1はN=1341, time2はN=1099)の対応はなかった)。調査材料は次の通りであった。(a)デモグラフィックデータ: 性別とサークルへの所属を尋ねた。(b)SC(仲間・クラス・教員): PSCS-U(芳賀他, 2012)33項目, 5段階評定(c)抑うつ度: K6(Kessler, et al.(2002 古川他訳 2002))6項目5段階評定(d)大学満足度: Benesse(2008)を参考に作成した。7項目6件法(e)人生満足度: SWLS(Diener et al.(1985 大石訳 2009))5項目7段階評定。統計解析はSAS9.3を用いた。

結 果

各変数の関連を調べるために相関分析を行った。まず、SCのtime1, 2間の相関係数は、SC(仲間)で $r(21)=.61$, SC(クラス)で $r(21)=.82$, SC(教員)で $r(21)=.47$ であり、中-強程度の相関

があった($p<.001$)。次に、全SCと性別構成の関連について調べたところ(Table1), time1, 2のSC(仲間, クラス)得点は、共に女性が多いことと中-強程度の相関が見られたが($r(21)=.79, .45$), 同得点は、サークルへの所属率とは有意な相関が見られなかった。次に、SC(仲間, クラス, 教員)とSWB(抑うつ度, 大学満足度, 人生満足度)との相関を調べた(Table1)。SC(仲間)のtime1, 2得点は、同時期の人生満足度との間に強い相関($r(21)=.70, .63$)が見られ、同時期の抑うつ度との間に弱-中程度の相関($r(21)=-.54$)と有意ではないが負の相関($r(21)=-.37$)が見られた。しかし、SC(仲間)と大学満足度の相関はtime1のみ($r(21)=.49$)に見られた。次に、SC(クラス)のtime1, 2得点は、同時期の人生満足度との間に中程度の相関および有意ではないが正の相関($r(21)=.57, .40$)が見られた。しかし、SC(クラス)と大学満足度との有意な相関はtime1のみ($r(21)=.70$)であった。一方、SC(教員)のtime1, 2得点は、同時期の大学満足度との間に中-強程度の相関($r(21)=.80, r(21)=.44$)が見られた。

考 察

本研究では、大学間で、1-2年次間の共通性と差異について検討した。共通性については、SC(仲間, クラス)と男女構成率の関連、全SCの測定の安定性、SC(仲間)と抑うつ度および人生満足度の関連、SC(クラス)と人生満足度の関連、SC(教員)と大学満足度の関連が確認された。芳賀・高野・羽生・坂本(投稿中)は、大学2校の学生個人レベルのSCを測定し、安定性があることを示している。本結果は、大学レベルのSCの測定もまた安定性があることを示唆していると考えられる。また、仲間, クラス, 教員それぞれのSCがSWBに対してもつ機能が異なることも、先行調査(稲葉, 2015)の結果を支持している。一方、1-2年次間の主な差異として、1年次のSC(仲間, クラス)は大学満足度と関連していたが、2年次では関連しなかったことがあげられる。これらを踏まえると、2年次において大学満足度の高い大学は、SC(教員)が十分に機能している大学であると考えられる。ただし、本分析では学生個人の分散を考慮していないため、これらの解釈の一般化には慎重を要する。今後は、限界点を踏まえつつ、SCの蓄積とSWBの向上の関連について、引き続き検討する。

Table1 Time1-Time2におけるSCと各変数の相関係数(N=23)

	SC(仲間)		SC(クラス)		SC(教員)		Mean(SD)	
	time1	time2	time1	time2	time1	time2	time1	time2
性別構成(男0, 女1)	.79***	.45*	.45*	.55**	.04	-.36*	.71(.21)	.72(.23)
サークルへの所属率	.06	.05	-.18	.19	.18	.10	.72(.14)	.58(.16)
抑うつ度	-.54**	-.37†	-.28	-.02	.16	.33	14.06(.87)	14.71(1.33)
大学満足度	.49*	-.12	.70***	.32	.80***	.44*	24.00(1.83)	22.48(1.73)
人生満足度	.70***	.63***	.57***	.40†	.15	-.18	19.59(1.25)	19.47(1.20)

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$